フィンランド（パイオニア交流）に行ってきました！

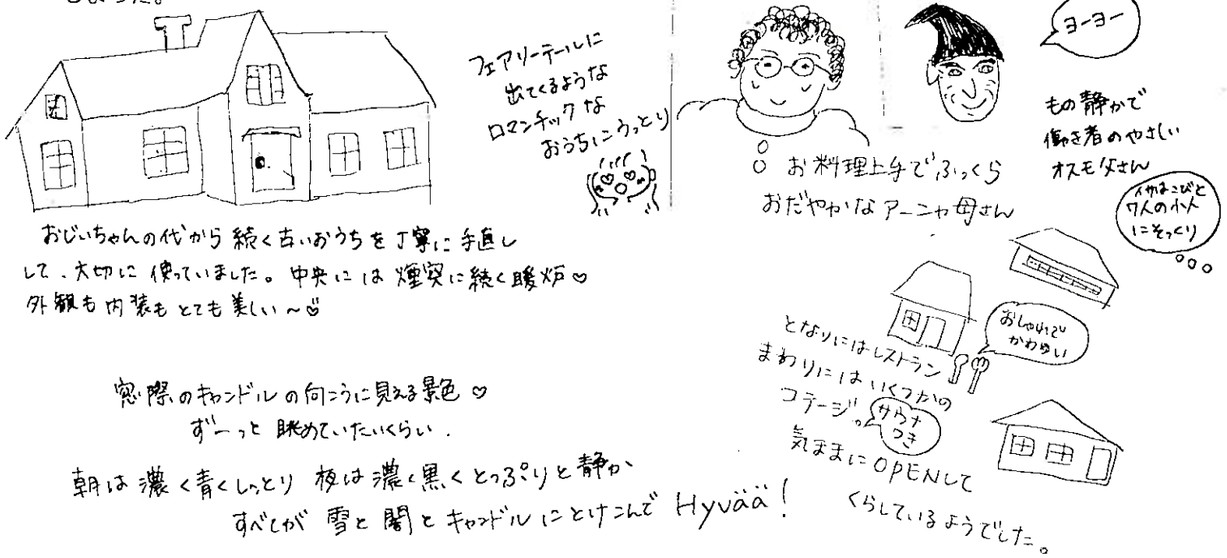
埼玉 鶴ヶ島たんぽぽファミリー
サユチー
2005年12月～2006年1月

「何年フィンランドに住んでるの?」

幼い頃からの夢、サンタクロースに会ってしまった！フィンランドホームステイに入る前のほんの数時間、Santa Village に行くことができたのだ。（ほんとにサンタに会えるなんて！夢みたい！）順番を待ちながら高鳴る胸の鼓動を押さえるのがやっと。そして迎えた私の番。がっしり大きいからだと、もじゃもじゃのお髭のサンタが優しいまなざしを浮かべて暖炉の脇に座っていた。（きゃー「ナマ」サンタだ！）私はフィンランド語で自己紹介。「ヘイ！ミッタクール？キートス　ヒューバ？ミナオレン　サユリ　ヒラサワ・・・」次の瞬間、サンタが私に向かって次から次へとものすごい勢いでフィンランド語を話し始めたのだ。（きゃぁぁ！！！）ただサンタにフィンランド語で話しかけたいだけだった私は、面食らってしまった。驚いて呆然と立ち尽くしていると、サンタは英語で話してくれた。「何年フィンランドに住んでいるの？」。（えー！！！）それをきいてまたもやびっくり。だって私、昨日フィンランドに来たばかり。。。

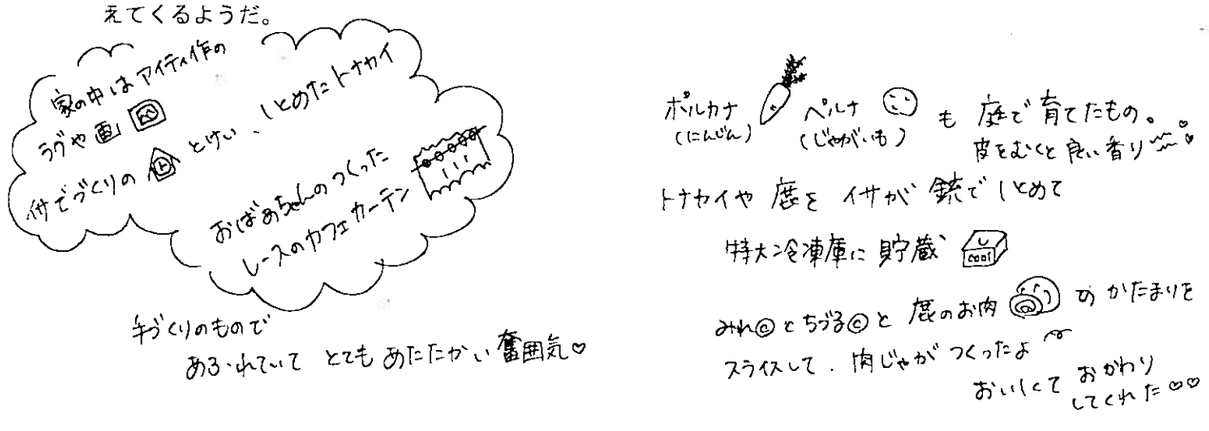
初ホームステイは　北極圏で

冬のフィンランドは寒い。そしてほんの数時間を除いて、あとは一日中真っ暗なのだ。空気も凍るマイナスの世界。そんなロバニエミからさらに北へ２００km、車で３時間ほどのところに私のホストファミリーが待っていた。そこは北極圏だった。コテージやレストランを管理するのが仕事で、トナカイ狩りをし、野菜を育てながら暮らしている。見かけはちょっとこわいけど働き者でやさしいイサ（お父さん）オスモ７５才とふくよかで甘いものが大好き、お料理上手なアイティ（お母さん）アーニャ７０才。絵本で見たような煙突つきの三角屋根の大きなおうちで、物静かでやさしくて穏やかなイサとアイティのもと、新潟のフェロウ後藤みれちゃんとコーディネーターの船橋ちづるちゃんと私の暮らしがはじまった。



朝から晩まで　「ミカ　オン　タマ？」

私たちをあたたかく迎え入れてくれたイサとアイティは、実はまったく英語が通じなかった。ご飯のとき「please」と思わず言ってしまったのだが、アイティはそばにいたけれど全く伝わらなかった。伝わるどころか何事もなかったかのように、英語の音がすうーっとその場を通り抜けていっただけだった。（ほんとうに通じない！）自己紹介といくつかのフィンランド語、あとは絵を描いたり、手足をばたばた動かすジェスチャーで乗り切った、文字通り体当たりのホームステイだった。

朝８時。辺りはまだ夜中のように真暗闇。アイティのいるダイニングへ私たちは降りていく。「ヒューバ　ホーメンナ！（おはよう！）」おいしそうな大きなハムやチーズ、スープやベリーが食卓をにぎわっていた。そして席に着くとみれちゃんが「ミカ　オン　タマ？」と言った。するとアイティは「タマ　オン　トマテ」と答えた。（きゃあ。おもしろい！）私もまねして、そこらじゅうにあるものを指差しながら、「ミカ　オン　タマ？」と繰り返した。「ミカ　オン　タマ？」ときく私たちに、イサとアイティは何度でもフィンランド語で返してくれた。返してくれるたびに、私たちは嬉々としてそれをまねた。（楽しい！）そのうちなんでもいいから、自分で言ってみたくなった。「タマ　オン　ボウイ」「タマ　オン　レイバ」イサにむかって指さしながら、覚えたてのフィンランド語をひとつひとつ伝えてみた。だが、なぜかどれも間違っていた。「フオノ　スオミ！！」（だめなフィンランド語！みたいな感じの意味）でもイサはとてもうれしそうだった。そしてイサが嬉しいと私もとっても嬉しかった。私の話すフィンランド語が違っていても、イサはそこにいて「ヨーヨー」（そうだね。）とうなずいて、そしていろんなものを指差しながらフィンランド語を私に投げ返してくれた。

初めの頃は、食事が終わるとすぐにテレビのある奥の部屋に行ってしまったイサが、いつからだろうか気付くといつも私たちのそばにいてくれた。いつまでも「ミカ　オン　タマ？」ときく私たちにつきあって、眠い目をこすりながらも夜中まで一緒におしゃべりした日もあった。一緒にステイしたちづるちゃんが「アイティとイサはもちろんだけど、みれちゃんともサユチーとも、私は家族になりたかったんだなぁとあとで思ったんだ。」と言ってくれた。最高の仲間だった。たのしかった。心の底から幸せだった。帰国してその話を夫にした。すると夫は「あなたたちにとってイサはフィンランド語の先生じゃなかったんだね。先生と思っていなかったから、そんなふうに気持ちを伝えたくなったんだね」と言った。そうだった。あのとき「これはなに？」とイサにきいてばかりいたけど、答えはどうでもよかった。「ミカ　オン　タマ？」って言うことが楽しくて、きいてくれることが嬉しくて、そして（この子達は何を言おうとしているんだろう）とそばにいてくれるイサの気持ちが嬉しくて。。。だから私たちはいつもイサとアイティのそばで、話したい嬉しさに溢れていたんだ。イサと私たちの間をフィンランド語が行ったり来たりするたびに、私たちの気持ちは近づいていったように思う。お互いのこころも重なっていったように思う。別れの日、涙がとまらなかった。イサが採掘したアメジストの原石を一人ずつに持たせてくれたのだ。「コルメ　トュッタ（３人の娘）」今もイサの声がきこえてくるようだ。